

2011年6月3日～7日にChicagoで開催されたASCO 2011 Annual meetingに参加してきました。小生にとっては2年ぶり2度目のASCOでした。ChicagoのMcCormick Placeは北米最大のコンベンションセンターということで2年前のOrlandoよりさらに巨大なそのスケールに圧倒されました。プレナリーの会場は大型のサブスクリーンが横3列縦5-6列もあり、壇上は遠くにかすんでいるほどでした。ASCOの会員も3万人を超え、癌診療に取り組む多くの世界中の人々の存在を改めて実感できました。

学会報告ですが、私の専門である上部消化管での演題を中心に報告させていただきます。

上部消化管での注目は、韓国台湾中国で行われた CLASSIC 試験 (#LBA 4002) でした。Stage II・III胃癌 D2 郭清手術後の XELOX 療法の有効性確認試験で、ACTS-GC と同等の手術単独成績に対して XELOX 補助化学療法の有効性が示されました。主要評価項目が 3 年 DFS であり、OS の追跡結果が待たれます。特に Stage III胃癌では、日本にもある意味世界標準とも考えられるプラチナダブルットが導入される日も近いと感じました。

JACCRO GC-05 に関連するものとしては、韓国から胃癌 2nd-line 治療の約 200 例規模の第 III 相試験が報告されました (Abs. #4004)。BSC に対して Irinotecan あるいは Docetaxel が有意に生存を延長し、2nd-line 治療の有効性が示されました。BSC を標準とする日本では到底できない試験ではありますが、韓国に先を越されたようで悔しい感情もありました。しかし、GC-05 を含めて今後日本から様々な 2nd-line 治療のベストレジメンを決める試験結果を報告する上では追い風になるのではとも感じました。

他には、SAMIT の安全性データ、JCOG や ACTS-GC のバイオマーカーの検討、胃癌化学療法臨床試験における PFS の OS に対する surrogacy をみる解析、genomic subtypes が薬剤効果や予後と相関するというシンガポールの研究、など将来のエビデンスにつながるような興味深い発表がなされていました。

また現地では、藤井先生と 2 回ほど話をさせていただきました。藤井先生ご発表の GC-03 のこと、GC-03 をふまえた今後の胃癌化学療法の展開について、直前に無事症例集積が終了した GC-05 のことなど、いろいろ教えていただき勉強になりました。

ASCO 期間中、日本に対しては震災のことを気遣う場面が所々にみられ、日本人として心強く感じました。今回は日本人の参加者も多く、学会や臨床試験を通しての知り合いの方々を含め交流を深めることができ、非常に有意義な時間を過ごせました。新規エビデンスを自分たちの手で確立できるよう臨床試験を推進する必要性を再認識いたしました。

最後に、今回このような素晴らしい機会を与えていただきました JACCRO および関係各位に深謝申し上げます。